

(4) 小来川(おころがわ)鉱山跡一追記

11年ぶりに再訪した。GPSであるガーミンによる正確な経路ログを得ること、現地の現状を確認することを目的とした。他に、後半に添付している既報の探査記中の「小来川鉱山図 明治43年」を手引きに、既報の現地の南西方向にあると思われる「金山沢」に沿った幾つかの坑口の探査も試みた。1回だけだが、何ら坑口跡を確認することができなかった、空振りであった。資料等を再精査し、再調査をそのうちに試みたい。

2020年12月



図1 A点は「いたが・せせらぎプールのパーキングエリア」ここから149号に入り、道なりに進んでいく。GPSのガーミンで取得した現地までの経路ログを水色曲線で示している。B点は新谷地区。赤輪が現地。

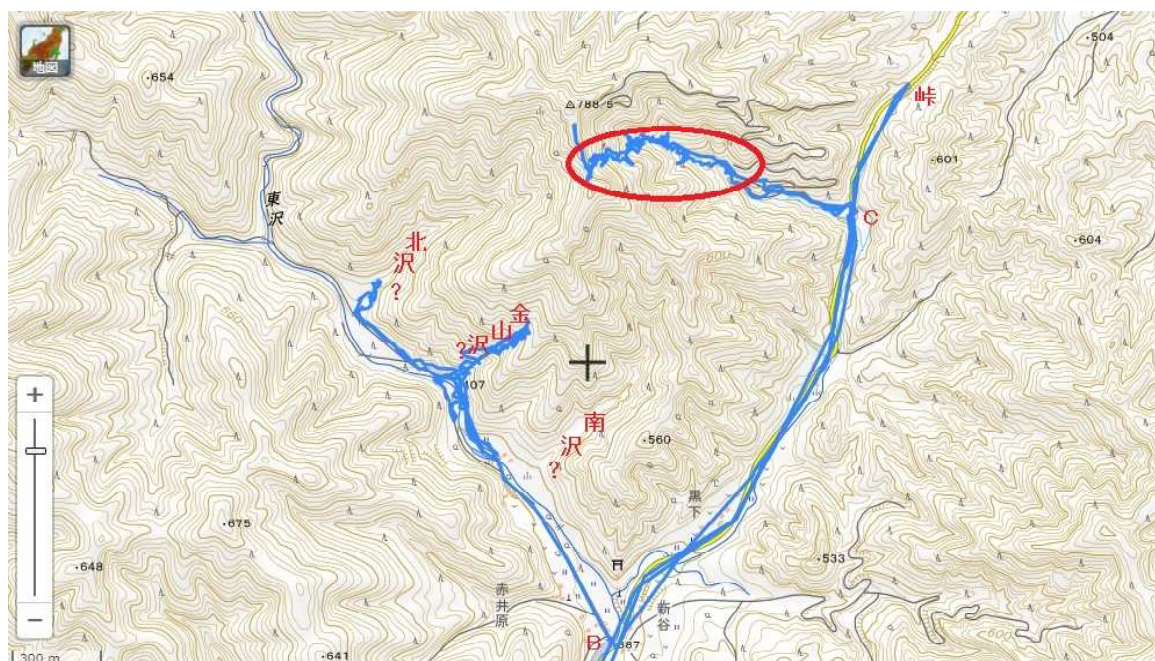


図2 図1の部分拡大図。C点から徒歩で現地へ行く。B点で左の支道に入り北西方向への経路ログは、既報で添付した小来川鉱山状況図を手引きに、「金山沢」と思われる沢を探索し回った経路ログである。残念ながら、一度だけだが、鉱山跡らしい証拠は確認できなかった。なを、「北沢？」の先まで車での通行は小型でも問題は無い。車横付けで現地探査ができる。次回を期待したい。

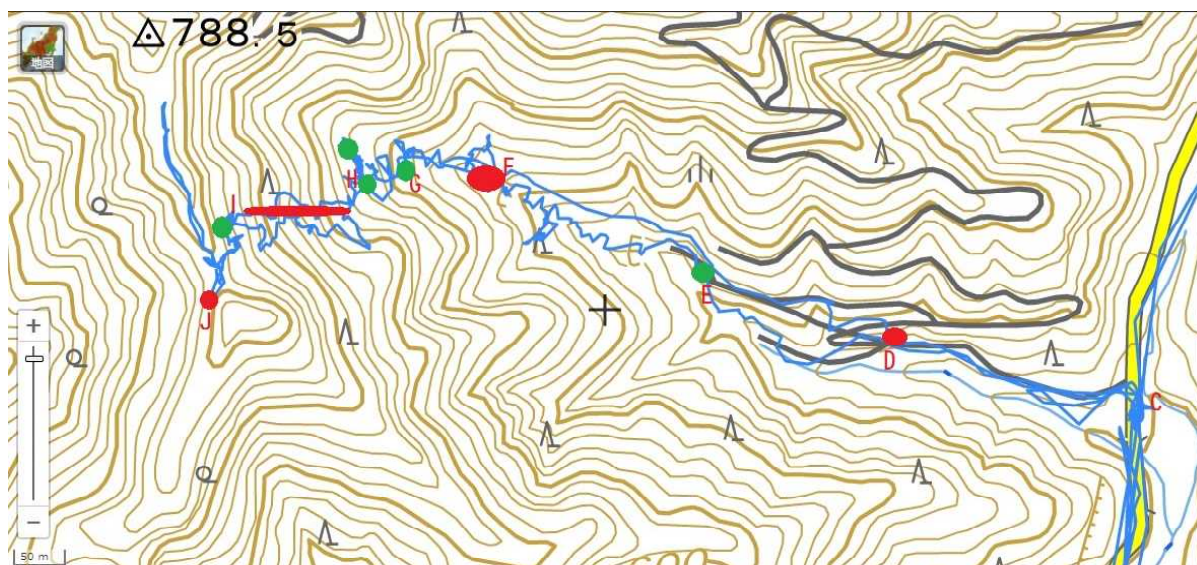


図3 図2の部分拡大図。赤色丸は鉱山施設跡。黄緑丸は坑口跡。H点とI点の間の赤線分は斜面に一直線に伸びている廃レール。各箇所の詳細は以下の写真で紹介している。

鉱山跡写真



写真1 C点である。峠の方を向いて撮っている。赤線のように林道へ入っていく。この付近、数台は車を止められよう。なを、約300m先の峠には広い側路帯がある。車が多い場合には、そこを利用できよう。



写真2 D点付近である。藪だらけの林道を登ってくると右手にあった廃屋。コンクリート基礎などがあることから鉱山施設跡思われる。



写真3 E点付近。沢の左岸、廃林道脇にあった坑口らしい跡。これより上流には沢に沿って登って行こう。沢は涸れ沢である。それほど急ではないので登り上がるのに困難はない。孔雀石が薄くついた転石が結構転がっている。



写真4 写真3の坑口跡を入口から覗いてみる。奥行きはなさそうである。それとも、下部が完全に埋まってしまったのかも。



写真5 F点付近。プラトーの上から下流部を見ている。10年前には、広いプラトーであったが、現在は沢として深く削られている。周りには鉱山設備、鉱山器具が結構沢山残っている。銅の2次鉱物である孔雀石は容易に採集できる。が、気に入る銅の2次鉱物が採集できるかは、運が第一、第二は熱意と努力。



写真6 プラトー部にあった「巨大」な発動機。多分、分解して持ち上げ、ここで組み立てたのと思うが。



写真7 G点付近。赤丸の黒いところに坑口跡。右側にコンクリート基礎がある。



写真8 その坑口の入口から内部を見る。何となく中に入りたい誘惑に駆られるが・・・



写真9 H点付近。左側の木立の裏下に坑口跡を確認。赤輪の所。右側の垂直岸壁には、薄い露頭鉱脈が走っている。



写真10 写真9の赤輪の所に近づいて足元を覗く。埋もれた坑口跡と思われる。



写真 1 1 写真 9 の所で右手に延びている林道を先に少し進むと、数十m先に小さなプラトーがあり、左手の山側にあった坑口跡。赤輪の所。



写真 1 2 その入口から内部を覗く。



写真 1 3 H 点付近の少し上の所から I 点下まで、結構急な斜面に一直線状に廃レールが未だに残っている。I 点まではこの廃レールに沿って直登するのが一番良さそうである。



写真14 I点にあった坑口跡。10年前と変わらず。手前は小さいプラトーになっている。



写真15 入口から内部を覗く。



写真16 写真14の坑口に向かって左側をトラバース気味に進んで登り上がると直ぐに尾根に立てる。尾根上のJ点にあった巻上機。赤輪の中。10年前と変わらず。



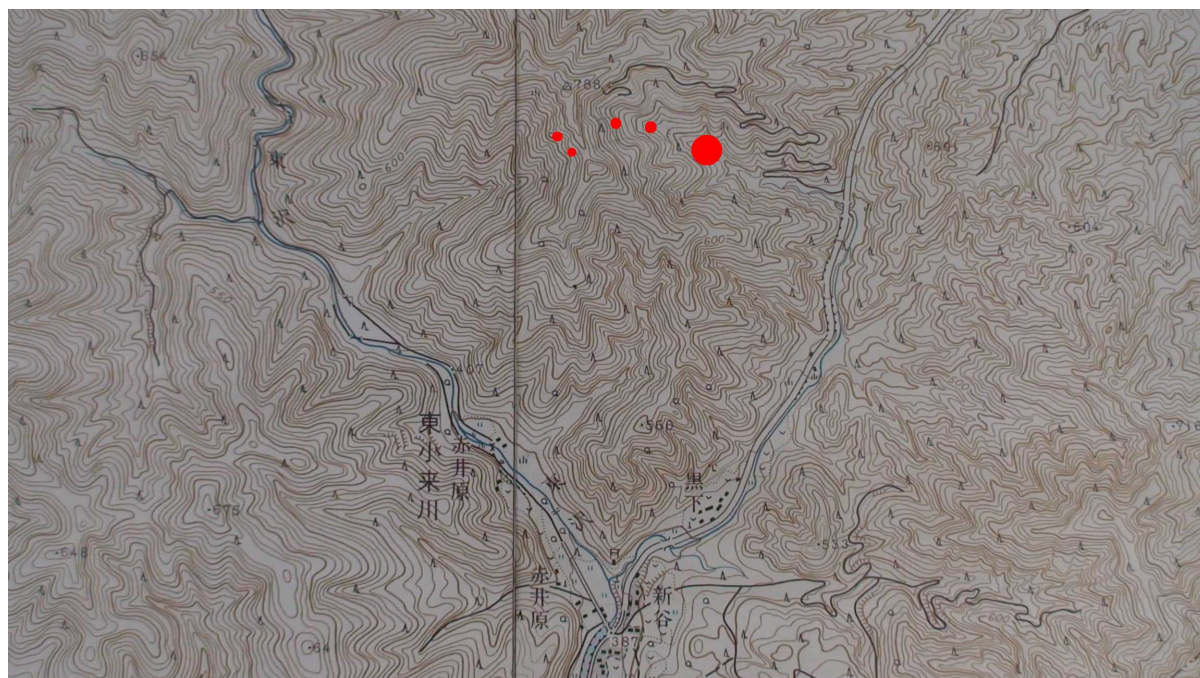
写真17 巻上機の様子。高さ1m程。今回は尾根を北に進んで行き、途中で戻った。この尾根の西側には既報で報告しているように2つの坑口跡を確認している。が、そこへ下るのを「億劫」に感じて、今回再確認はしていない。

(4) 小来川(おころがわ) 鉱山跡

マンガン鉱山が多い栃木の鉱山には珍しく、銅鉱石の鉱山であった。それほど遠くない所に足尾銅山があるので、相互に関係があるのかもしれない。この鉱山跡には、今市側からと鹿沼側から行く道がある。鹿沼側からは板荷地区を目指し、更に小来川地区へ進んでいく。東小来川の新谷地区から峠道路を、北北東に約1.6kmの所で、道路の左側に、林道がある。ここが鉱山への入り口である。車両は進入禁止である。林道の左側は沢となっている。林道を300m進むと、林道は大きく右に曲がっている。右に曲がらないで、沢に従って、西の方へ登っていく。沢を登っても良いであろう。緑色の孔雀石がこびり付いた石が見つかるかもしれない。沢の途中、右上の平らな所に、鉱山施設跡らしい廃棄物が残っている。沢を更に登っていくと、沢全体が大量のズリらしい様相を帯びてくる。ここに比較的孔雀石が転がっている。小さいが。このズリを乗り越え、沢全体は平坦になっている。地形図中の大きな赤丸の箇所である。錆び付いた機械類があり、鉱山施設跡であることがわかる。参考文献(1)の事務所跡であろう。沢の右手に、林道がある。これを道になり更に登っていく。岩盤が露出した岸壁の下に行き着く。最初の小さい赤丸の位置である。この岸壁に向かって左脇に抗口跡がある。大夫崩れているが。岸壁をよく見ると、少し緑色がかった風化花崗岩らしいものが見える。薄いながら銅の2次鉱物の孔雀石化している。岸壁の左上方に、上に向かって道がある。これを少し進むと、右側斜面一帯がズリであることがわかっていく。ここでも探せる。このズリを登る。途中から右手に廃棄レールがある。このレールの先に、全く潰れていないしっかりした抗口がある。図中の2番目の小さい赤丸の所である。多分、参考文献(1)の紹介図の左上端の抗口であろう。この抗口に立つと、風が吹き出している場合がある。ということは、先はどこかで地表に出ているということである。参考文献によれば、尾根の向こう側に繋がっているとか。この抗口の下全体がズリである。が、めばしいのは皆無である。この抗口の左側から尾根の上に上られる。尾根の上には鉱山跡らしい形跡が見れる。上がった後、尾根の向こう側に降りていくと、幾つかの抗口がある。図中の左端の赤丸の位置である。この抗口下全体がズリである。降りていくと、途中また幾つかの抗口があることがわかっていく。

大きい赤丸当りから、左端の赤丸の下にあるズリ当りまでが鉱山跡である。

参考文献(2)によれば、東沢をもっと北に遡った所に飯場があった。その近くに北東方向に向かう金山沢があり、788mの三角点に向かっていった。この金山沢に幾つもの抗口があったそうである。ズリがあるかどうか。いつか探査してみたいと思っている。「金山」の名称に意味がありそうな気がする。



赤丸が小来川鉱山跡

地図 国土地理院 2万5千分の1 地形図「今市」

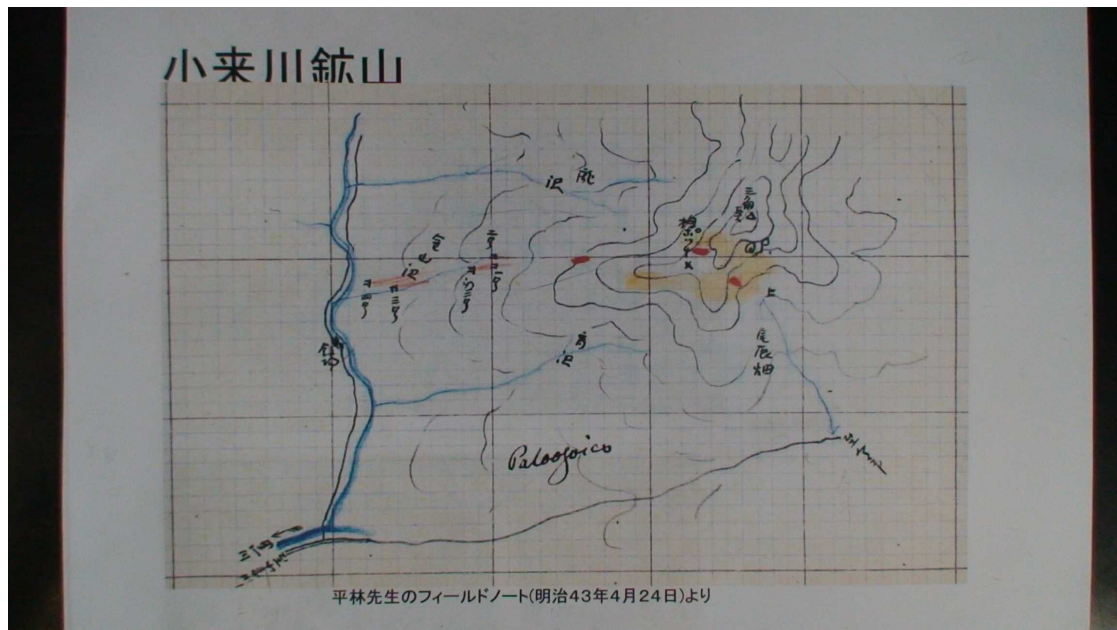
探査日 2009年3月、その他の日

参考文献

(1) 「鉱物採集フィールド・ガイド」 草下英明、草思社、1982年

(2) <http://www.geocities.jp/matagi44/okorogawa.html>

参考文献（２）からの転写地図である。明治４３年に記録された鉱山状況図である。現在の地形図と比べると面白い。この図には方位は明示されていないが、現在の地形図と対比させると手書き地図の右上が北で、左下が南。左下に、水色で沢と文字「至今市」が記されている。この沢が、現在の鉱山跡への林道となっている。古地図からすれば、左に位置している沢は地形図では東沢である。この沢に飯場が書き込んである。鉱山関係者の宿泊施設であろう。そこから、「金山沢」に沿って、幾つもの坑口が書き込んである。この沢を上り詰めたところが、地形図中の小さい赤丸に該当する。参考文献（１）にはこの金山沢については全く記載がない。探査の意欲が沸き上がってきている。

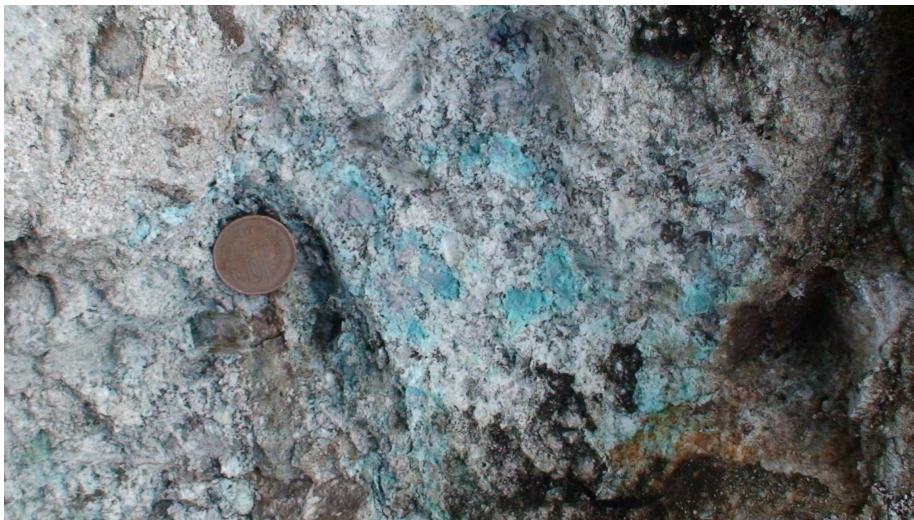


参考文献（２）より転写。方位は右上が北で、左下が南。

鉾山跡写真



鉾山事務所の跡らしいところのズリ



少しの孔雀石が見える



レールの跡が残っている



しっかりした坑口。風が吹き出している



尾根上にあった巻き上げ機

採集鉱物写真

品名 孔雀石 銅の主要鉱物。 緑色の顔料
化学組成 $\text{Cu}_2(\text{CO}_3)(\text{OH})_2$
色 緑がかった白～緑

光沢

条痕色

比重 4.1

硬度 3.5

結晶系

劈開 一方向に完全

共生鉱物

解説 (1) 銅鉱山の表層部に産出する2次的鉱物。銅の主要鉱石である黄銅鉱が水に溶け、水に溶けている二酸化炭素と反応して生成する。形状は様々である。緑色の発色は銅によるものであり、堆積によって出来た縞模様が孔雀の羽に似ていることからくじゃく石という和名がついた。



緑色の部分。母岩は何でもあり得る

品名 藍銅鉱 青色の顔料
化学組成 $\text{Cu}_3(\text{CO}_3)_2(\text{OH})_2$
色 青

光沢

条痕色

比重 3.8

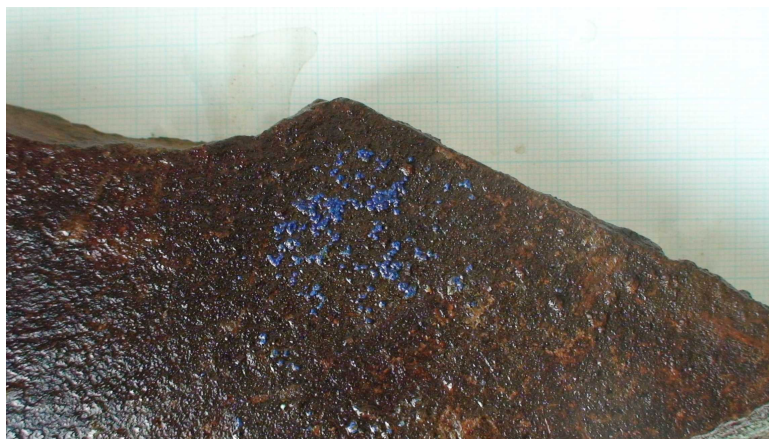
硬度 3.5

結晶系

劈開 一方向に完全

共生鉱物

解説 (1) 孔雀石の兄弟である。構成元素の成分比が異なっているだけ。藍銅鉱の方が孔雀石に比べて安定性が低いので、時間の経過と共に、孔雀石に変化する現象も起こる。



中央の青色の点々